

地球研本研究（F R）プロジェクトに係る事後評価書

2007年 3月 1日

研 究 課 題	琵琶湖－淀川水系における流域管理モデルの構築
研 究 期 間	平成14年4月1日 ～ 平成19年3月31日
プロジェクト・リーダー	谷内 茂雄

研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針によく適合し、当初の研究目標はほぼ達成された。

評価委員会のメンバーのコメントは以下の通りである。

- [1] コンセンサス構築の方法が確立された。環境問題の多くでは、地域住民の協力意欲が何よりも重要な要素であり、本プロジェクトはキーとなる方法をうまく見つけている。
- [2] 社会科学と自然科学との間の consideration にもとづく interesting な research である。たしかに、社会学者と自然科学者が協力したことは認められるが、文理融合の成果は必ずしも explicitly visible ではない。
- [3] 科学的立場から見て成果は十分評価できる。但し、質問でも述べたようにこうした研究成果を実装(implement)するに当たっては、住民との間に十分な communication が必要で、しかも一方的な説得でなく local knowledge の学習（科学者の側の）も含めて双方向的な統合的結果を求めることが重要と思われる。とくに upstream assessment が必要！
- [4] 本プロジェクトにおいて琵琶湖水域における農業濁水が、農家の形態によって決まることが明らかにされた。また、新しい環境診断法を取り入れ農業排水と他の人間活動の負荷が総合的に働き琵琶湖に大きな影響を与えていることを明らかにした。そして琵琶湖流域の階層性を考えた流域管理モデルを提案している。高度経済成長によって琵琶湖の役割が大きく変化したが、それを元に人間と自然の相互作用を明らかにした。したがって、地球研の設置目的や研究目的に適合しており、当初の研究計画・目的を達成している。今後は研究成果のグローバル化、普遍化が望まれる。
- [5] 本プロジェクトは、流域の複雑さを理解するための学際的な手法の好例を示した。この研究チームがとった地域社会との対話のプロセスは、地球研が手がける他のプロジェクトへの適用が期待される。
- [6] 大変示唆に富んだ Case study である。 特にとりあげられた field の scale が地球環境問題解決を考える上できわめて重要なものであることや提案された「流域管理手法」がこの scale とよく調和したものであることを良く示している。
- [7] 本プロジェクトは、階層構造をもつこのテーマを学際的に研究するための独創的な手法を示している。能力構築とパートナーシップ構築についても重要な方法を示している。おめでとう！

- [8] 本プロジェクトは、階層に基づいて流域の問題を分析することにおいて大きな進展をなし遂げた。これは地球研の理念にとって重要な意味を持つ。階層間のコミュニケーションを促進するために、階層化された流域管理を通じてこれらの問題にアプローチするという発想はすばらしい。さらに改良を加える必要がある。そして、そのようにして整備されたならば、管理ツールとして利用できるようになるだろう。
- [9] 「問題の全体像の解明」がどうして目的になるのだろうか？ 私の理解では、報告書の d) に述べられていることはほとんどが当初のプロジェクト目標の繰り返しだ。本プロジェクトは「方法のプロトタイプ」を提供すると主張している。それが本当なら、その方法は査読付きの学術専門誌に発表されるべきだ。
- [10] 「階層管理」というかたちで概念化しているのは興味深い。地域住民の参加を取り入れているのはいい考えだ。多面的なアプローチは見事である。すばらしいプロジェクトだ。
- [11] 他では見られない建設的な実験で地域住民を巻き込むことにより新しい方法を開発した。本プロジェクトで開発された方法を一般化して他の事例にも適用できるようにするにはどうすればよいだろう。

地球研研究プロジェクト評価委員会委員長

巖 佐 庸 印



委 員 (別添のとおり)